

V類の属する時期はP-53や配石遺構などの出土例から、縄文時代後期前葉に属する可能性があるが、後期前葉の遺構群は中期前半に遺された礫石器を使用した痕跡が認められるため、断定できない。中期前半と後期前葉の可能性がある。

I・II・V類は無名の沢に続く斜面際I-1・2に多く分布している。中期前半の遺構群が分布するII-1区にはほとんどみられない。これは、台石・石皿を使用する作業が、無名の沢の付近で行われたこと、もしくは後期前葉の集団が、中期前半の集団が遺した台石・石皿を移動し、配石や石組炉などに再利用したことが推測できる。

なお、各類型の台石・石皿とすり石類（すり石・扁平打製石器・北海道式石冠）との組み合わせ関係については他遺跡の状況などを広く検討する必要があるため、今後の課題としたい。（坂本）

4 アスファルト付着遺物について

アスファルトの明瞭な付着は、遺構出土（P-21・27）のスクレイパー2点、包含層出土の石鏃13点、つまみ付きナイフ2点にみられた。石鏃の付着率は107点中の12%である。

近隣の遺跡では、森町濁川左岸遺跡、オニウシ遺跡、鷺ノ木4遺跡、八雲町山崎4遺跡、栄浜1遺跡、浜松2遺跡、野田生4遺跡、野田生2遺跡、野田生1遺跡、コタン温泉遺跡、浜松5遺跡などでアスファルト付着遺物が確認されている。

アスファルトは地表に漏れ出した原油中の揮発成分が失われて残った不揮発性の物質であるため、油田が分布する地域で産出するものである。北海道においても渡島半島の本古内・森・八雲、日高～石狩～羽幌～天北～サハリンにかけて石油やガスが湧出する油田や油徴地が知られる。森町域では、鷺ノ木と濁川盆地に油徴地が知られる。濁川については、賽の河原と呼ばれるいわゆる地獄谷で、鷺ノ木については桂川の中流でそれぞれ石油の湧出が伝えられている。現地を確認した所、濁川では油徴を確認することができなかったが、鷺ノ木では鷺ノ木4遺跡前面の桂川川岸に石油の湧出により褐色に変色した部分を確認することができた。ほかに近隣においてアスファルトが採取された可能性が高いのは八雲町山越の油徴地である。ここでは、明治6～8年に道内の地質調査を行ったライマンがアスファルト1.5トンを確認している。また近接する野田生1遺跡の石器のアスファルト付着率は高率で、秋田県や新潟県の油田に近い遺跡のものと比較できる付着率である。

倉知川右岸遺跡出土石鏃のアスファルト付着率も、道内の例から見ると高率である。点数から見ても石鏃のアスファルト付着点数が10点を超える北海道内の遺跡には以下がある。本古内町新道4遺跡32点（晚期中葉か）、札苅遺跡73点（晚期中葉）、上磯町茂別遺跡15点（続縄文恵山式期）、添山遺跡59点（晚期中葉）、七飯町聖山遺跡150点（晚期中葉）、戸井町戸井貝塚99点（後期初頭）、八雲町野田生1遺跡57点（後期中葉）、礼文町船泊遺跡20点（後期中葉か）。上記の遺跡は、本古内町釜谷、八雲町山越、天北地域という石油湧出地に近い遺跡で、いずれも身近な産地からアスファルトを得ていたものと推定できる。また北海道内のアスファルトの利用は松前町松城遺跡、函館市権現台場遺跡、恵山町日の浜砂丘遺跡などにおいて縄文時代中期から確認できるが、後期前葉以降になるとアスファルト付着遺物が出土する遺跡が増加する。（福井）

5 自然科学的分析結果について

（1）放射性炭素年代測定結果

9点の試料について測定を行った。試料の内訳は、縄文時代中期中葉の遺構のもの4点（竪穴住居跡：2点、土坑：2点）、縄文時代後期前葉の遺構のもの5点（竪穴住居跡：2点、土坑：3点）であ